

# 学生アスリートの学習支援について : 山梨学院大学とアメリカの大学の事例

著者名(日)	長倉 富貴
雑誌名	山梨学院大学経営情報学論集
巻	17
ページ	109-112
発行年	2011-02-09
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1188/00000315/">http://id.nii.ac.jp/1188/00000315/</a>

## [研究ノート] 学生アスリートの学習支援について ～山梨学院大学とアメリカの大学の事例～

長 倉 富 貴

### 学生アスリートの増加と大学の責任

1990年後半より、学校体育の教員を養成することを主な目的とした従来の「体育学部」以外の非体育系学部にも国内トップレベルのスポーツ競技者が入学する例が増えている。大学によっては非体育系学部においても「スポーツ推薦枠」での学生を受け入れたり、大学でのスポーツ活動へ多額の助成を行う<sup>注1</sup>などしてスポーツ競技者を学生として積極的に受け入れている。日本のスポーツを支えてきた「企業スポーツ」が経済不況により衰退する中、国内トップレベルの競技者にとって、大学に在籍しながら競技スポーツを続けることは当然ながら魅力的な選択肢の1つとなっている。また大学においても、大学全入時代に入り、学生の確保に頭を悩ませる中、トップアスリートを受け入れることは体育系大学に限らずとも多くのメリットが考えられる。学生アスリートの活躍はメディアからも取り上げられ、大学にとっては「知名度の向上」「大学イメージの向上」のメリットがあることに加え、特に地方にとっては地元大学生の活躍は「地域プライド創成」効果もあり、大学としても地域に貢献できることになる。スポーツ環境を整えるために多少の経済的負担をしても十分ペイされるものなのであろう。

大学での部活動は課外活動であり、「学生の自主活動」であり大学教育と何ら関係するところではない、という意見がある。実際に、部活動が大学教育の一部であるか否かの議論は先行研究でも数多く交わされてきた。しかし最近の研究をみると課外の部活動を「大学の教育活動

の一環」と位置づける見解が定着しているようである。筆者の母校、上智大学は部活動は夜8時までと規制していることから見てもわかるように学生のスポーツ活動を特別に奨励している大学ではないが、その課外活動規定には以下のような文言が明記されている。「課外活動と正規の学業とは常に相関関係にあるべきものである。すなわち課外活動があつてこそ正規の学業の重要性をより深く認識することができる」。

大学がスポーツ推薦枠を設け、積極的にスポーツ競技者を「学生」として迎え入れるのなら、単なる「部活動」とはまた異なる次元の話になってくる。大学は、学生アスリートのためにスポーツをする環境を整えるだけでなく、学生が学業を安心して取り組めるような支援体制も整える必要があると考える。

本稿では、学生アスリートを学習面からサポートする大学の取り組みをいくつか紹介したい。

### 山梨学院大学の取り組み

山梨学院大学においては、1977年から「カレッジスポーツの振興」を大学の理念に掲げ、強化クラブを指定しスポーツ活動の支援に力を入れてきた。ハード面だけでなくソフト面での支援も積極的に行い、体育系学部を設置していないにも関わらず、国内外での大会でトップの成績を収めるアスリートを数多く排出し、オリンピックの大会には、23人の選手と7人の監督、コーチなどのスタッフを送りだしてきた<sup>注2</sup>。山梨学院大学ではスポーツ競技を行う施設や指導者の整備だけでなく、学生が部活と学業の両立をスムーズに行うためのソフト面で

の支援も積極的に行っている。2003年度より Study Support for Athletes (S. S. A.) というアスリート学生を学習面からサポートする取り組みが、商学部（当時）でスタートし、2004年度には「カレッジアスリート研修」(現在は「アスリート・キャリア形成」に名称変更)という科目が新設され、全学の取り組みへと拡大した。基本的な文章作成能力、キャリアプランの形成などを指導するクラス形式の「アスリート・キャリア形成」と課外の時間に個別にカウンセリングや学習アドバイスが受けられる S. S. A. により効率的な学習支援がアスリート学生に対して行われている。また研修を受けた学生アドバイザーを活用し、「アスリート・キャリア形成」の授業を全面的にサポートし、課外に SSA 専用のルームを設け、学生アスリートがノートの取り方やレポート作成の方法、試験勉強の仕方などを個別にアドバイスを受けられる機会を提供している。

2010年11月に文部科学省より新設の「スポーツ功労団体賞」の表彰をうけたのは山梨学院が本気で取り組んできたこれらのハードとソフトの総合的な支援体制が評価されたことによるものであろう。山梨学院大学が行っているような学生アスリートを対象とした学習支援の取り組みは実は国内ではきわめて珍しい。

### アメリカの大学の事例

カレッジスポーツの先進国であるアメリカではどのような学習支援を学生アスリートに対して行っているのだろうか。この夏アメリカに渡り4つの大学でヒアリング調査を行ってきた。

まず日本とアメリカの大学の大きな相違点はアメリカには National Collegiate Athletic Association (全米大学体育協会: 略称 NCAA) という大学の枠をこえた組織があるということだ。

米国においても学生アスリートの学業とスポ

ーツの両立に関する問題は1970年代より議論されはじめ、Whitner and Myers (1986) らにより、カレッジスポーツにおける課題点や学生支援の難しさが指摘されており、その後、Whitner (1988) は、学生アスリートのスタディスキルの評価方法、大学の学習支援のありかたなどを具体的に提示した。また、当時人気だった大学のフットボール部の選手のマナーの悪さや危険プレーによりケガ人が続出したことが問題になり、ルーズベルト大統領は1906年に主要な大学の学長を呼び出し、大学でのフットボール大会の中止を忠告した。この時に召集された学長のグループが、後にNCAAという組織をつくり現在に至るまで、大学の枠を超えた一元的なルールを規定し、アメリカのカレッジスポーツを統括している。NCAAでは大学側のリクルート活動に関する規定やスポーツ奨学金の配分、週当たりの学業と練習の時間数、指導者の男女比率、学生アスリートの男女比率等、詳細にわたって規定が設けられている。また、NCAAは1983年に Academic Progress Rate (APR) という評価システムを導入し、学生の学業成績に関する規定を追加した。学生アスリートが学業不振の場合、その程度により選手登録抹消、大会出場停止、練習時間の削減、スカラシップの減額、公表などの措置が下される。

また、米国では National Association of Academic Advisors for Athletes という大学アスリートを対象としたアドバイザースタッフの組織があり、日常的に情報交換、研修会、学業面で優秀なアスリートや大学の表彰なども行われている。

訪問した全ての大学に共通していたことはアスリート学生を対象とした学習支援専門の部署を学内に設置されていることだ。Academic Services for Student-Athletes などと呼ばれる部署には複数の専任スタッフが常勤しており学生アスリートに対して、履修アドバイス、学習

スキル、タイムマネジメント、アルコールや薬物の危険性、キャリアプラン、NCAAのルールや学則などについて幅広くアドバイスしている。本稿では Temple University と University of Central Florida の2つの大学の事例を紹介したい。

### 〈Temple University の事例〉

Temple University (フィラデルフィア、ペンシルバニア州) は NCAA の Division 1 に所属するアメフト、バスケット(男・女)、陸上(男・女)、バレー(男・女)など24のクラブと550人の学生アスリート(35,599人の履修登録学生)を抱える。Student Athlete Advising & Support Center (SAASC) という学生アスリート専門の学生支援の部署があり、Director、秘書、そして8人の常勤のアカデミックアドバイザーと8人の院生スタッフが働いている。SAASCはAthletic Departmentとは独立した部署で大学Writing Centerや大学事務局などと連携をとりながら学生アスリートのサポートを行っている。このSAASCは次の5つのミッションを掲げている。学習支援をメインにしながら学生アスリートに関する幅広い支援を行っている。

1. 「学生アスリートを卒業させること」
2. 「NCAA、連盟、大学のルールの厳守と不正行為をさせないこと」
3. 「学生アスリートが個人のもつ能力を開花させるための努力をサポートし、個々の困難を乗り越えられるよう支援すること」
4. 「学生アスリートに社会的、人間的、学業的なマナーを身につけるサポートをすること」
5. 「学生アスリートが社会にでて活躍する人材になるよう準備をさせること」

全ての1年生と転入生、そして学業成績がお

もわしくない上級生(GPAが2.5以下)はStudy Hallと呼ばれるものに参加しなくてはならない。学生は週に6時間(1回最低2時間のコマ)をこのStudy Hallで指定された場所で学習活動をしなくてはならず、入室退室の時間は学生IDのスキニングでしっかり管理されている。各クラブのコーチがSAASCのDirectorに申し出ることでこの強制勉強時間は増やすこともできる。このStudy Hallは平日の場合、夜の10時まで利用できる。

### 〈University of Central Florida の事例〉

また、University of Central Florida (オーランド、フロリダ州) では Academic Services for Student-Athletes という部署で16クラブ、400人の学生アスリートの学習支援を行っている。ここでは7人のアドバイザーとカウンセリングスタッフが常勤で働いており、8人の大学院生がアシスタント・メンターとして働いている。この部署では履修アドバイス、学習アドバイス、チューターサービスを行っている。UCFでは過去5年間に於いて先にあげたAPRの数値を14ポイントもアップさせ、全クラブの平均GPAは3.0以上を維持し、所属するConference USAからは多くの学生アスリートが成績優秀者としての表彰を受けている。また、卒業後に研究者として活躍している元学生アスリートも多い。このスタッフのほとんどはNational Association of Academic Advisors for Athletics (N4A)の研修プログラムを受けており定期的なカンファレンスや研修会に参加しており、質の高い学習支援を行っている。DirectorのMark Gumble氏に「この大学が成功している一番の理由は何か」と質問すると、大学のトップの理解と後押しがしっかりあること、そして「Moneyだ」という返事が帰ってきた。この大学では各クラブごとの学生の

GPA 平均値を常に公表し（これは他の大学でも行っている）、部の学生の平均値が0.5上があればボーナスを支給、大幅に下がれば監督の給料減額というシステムを導入し、クラブの指導者に学業面での責任を持たせたのだという。このシステムを導入して以来、監督コーチは学生の成績により注意を払うようになり、学習支援プログラムへ学生を参加させることにも積極的になり、学習支援スタッフと監督間の連絡・協力もスムーズになり、結果、かなりの成績アップにつながったのだという。

ネット上にも公開されている70ページにも及ぶ学生アスリートのためのハンドブックにはNCAAの規定やスポーツ選手としての栄養のとり方、ドラッグについてのガイド、大学の学習環境設備について、生活全般へのアドバイス、学生としてのマナー、奨学金・学生ファンドなどの情報、トレーニングルームの利用規定、アスレティックトレーナーの利用について、キャリアプランの立て方、など広範囲にわたってきめ細やかに示されている。

（本稿は、平成21-22年度の科研費「若手研究スタートアップ」の受給を受けて「非体育系大学における学生アスリートの学習支援体制」についての研究調査の一部を報告するものである。）

#### 〈参考文献〉

1. ロナルド・A・スミス（白石義郎・岩田弘三監訳）『カレッジスポーツの誕生』（2001）玉川大学出版部。
2. Whitner, Phillip A.; Myers, Randall C. "Academics and an athlete", Journal of Higher Education, Vol.57, No.6, 1986, Ohio state University Press.
3. Whitner, Phillip A., "Evaluation of a Study Skills Program for Student-Athletes",

paper presented at the Annual Meeting of the National Association of Academic Advisors for Athletes (Nashville, TN, January 6-9, 1988)

4. National Collegiate Athletic Association (NCAA), <http://www.ncaa.org/wps/portal>

5. University of Central Florida, "Student-Athlete Handbook 2010-2011", <http://asssdes.ucf.edu/docs/sahandbook2010.pdf>

6. 小西順人「大学教育におけるひとつの試み－中間報告－」、『大学改革と生涯学習』（山梨学院生涯学習センター紀要第13号）、2009年。

---

注1 立教大学は2008年度から「アスリート選抜入試」を導入し、これに並行して学内奨励金制度（2年で総額1億円）を設けて体育会を助成し「体育会活動の活性化をめざす」と大学HP上で発表している。（2007.7.4アクセス時）

注2 1992年のバルセロナ大会から夏、冬連続10大会に23人の選手（延べ人数31人）と7人の指導スタッフ（延べ人数15人）を送り出している。